

核医学教室30年

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/4485

核医学教室30年

The thirtieth anniversary for the Department of Nuclear Medicine

金沢大学大学院医学系研究科バイオトレーサー診療学(核医学)

利波 紀久

金沢大学に核医学講座が設立されてから30年余が経過した。教室の歩みを振り返り概略紹介する。

金沢大学で人体にはじめてラジオアイソトープが投与されたのは昭和29年9月である。

真性赤血球増多症患者に治療の目的でP-32が経口投与され、著効が確認された。この成功が弾みとなり、I-131による甲状腺検査、I-131標識ローズベンガルによる肝機能検査、I-131標識ヒップランによる腎機能検査、Au-198肝スキャン、Hg-203腎スキャン、I-131-MAA肺血流スキャンによる診断が行われるようになり昭和39年3月に医学部附属病院にアイソトープ部が設置された。放射性医薬品の開発と測定・撮像装置の進歩によりアイソトープ診療がさらに盛んとなり、その実績が評価され昭和43年9月に院内措置で核医学診療科が開設された。当時放射線科教授の故平松博先生が主任(兼務)、久田欣一先生(当時中央放射線部助教授)が常勤副主任を務め、非常勤医師4名(放射線科所属)の陣容であった。

久田先生の情熱と行動力、故平松教授の慧眼と政治力に診療と研究実績が評価され、昭和47年度文部省予算でわが国最初の核医学講座ならびに核医学診療科が誕生した。アイソトープ臨床利用から19年、久田教授をはじめ8名の専任教員で核医学の教育、研究、診療のすべてが託され昭和48年3月にスタートした。

講座設立当初から講義と実習には十分な時間をいただいた。講義時間数が講座の活力の指標であるように思われていた時代であり、新進のスタッフは自ら学びながら系統講義のほか核医学画像の読影と核医学検査、コンピュータ利用の実際、核医学治療などの臨床核医学を徹底的に教育した。最新の核医学知識を吸収した医師達は核医学診療施設のない病院に赴任すると、核医学診療の重要性を病院長に具申することとなった。その結果、北陸では多くの病院で核医学検査が当然のように行われるようになっていく。卒前教育の重要性を実感する。石川県の核医学診療件数は人口当たりで全国平均の2.5倍で第1位、2位は北海道で以下富山県、福井県と北陸の核医学診療の普及が目立つ(アイソトープ協会2002年実態調査)。ちなみに石川県の実績は過剰ではなく米国の平均診療実績に相当する。

教室の重要な使命として人材育成がある。教室在籍中の医師

を含めて30年間で約60名である。多くの医師が全国の核医学教室、放射線科教室の教授、助教授として、また、核医学専門医、放射線科専門医となり転出し活躍している。また、本学アイソトープ総合センター(現学際科学実験センター内)、附属病院医療情報部、保健学科で教授、助教授として活動している。国内外からは約50名の留学生、研究生が学んでいる。

核医学研究は臨床研究ならびに臨床に結びつく基礎研究を主に進めてきた。教室員が目標としてきた雑誌は核医学領域で最も権威のあるJournal of Nuclear Medicine (JNM)で、同誌を通じて多くの研究成果を世界に発信してきた。JNMの巻頭を飾った論文が2編、一度に4論文が紹介されたこともあった。

院内では臨床各科の核医学診療のほとんどを当教室が担当してきた。古い撮像装置を駆使しながらもレベルの高い診療を提供できたと思っている。PET検査が有効な手段となることを予測し20年前から設置に向けて取り組んできたが、幾度となく頓挫の憂き目にあい今日に至っているのは残念である。「21世紀の核医学は治療の時代」との認識で、平成13年10月から稼働している新病棟には最新の核医学治療病床6床を設置していただいた。将来を見すえて最新のアイソトープ治療に対応できる病棟となるように努めた。放射性ヨウ素による甲状腺疾患の治療のほかI-131-MIBGによる悪性褐色細胞腫や神経芽細胞腫の治療が稼働によって他の治療で効果がなくなってしまう患者の治療にあたっている。教室のHP(<http://www.kanazawa-u.ac.jp/~med2/23/>)や患者間のネットワークを通して全国から治療を求めて患者が集まり核医学治療の拠点との評価をいただいている。Sr-89による癌の骨転移疼痛治療、Y-90標識モノクローナル抗体による悪性リンパ腫の治療が行えるように、国際的に誇れるアイソトープ治療を目指している。

生体の代謝、免疫、神経伝達などさまざまな機能を画像情報として提供し、臨床に貢献することが過去、現在ならびに将来にわたる核医学の命題である。ペプチド、レセプタ、遺伝子など生体内分子のイメージングの開発と臨床応用を推進し、さらに新しい核医学治療の展開をはかり、研究と診療を進め、これからも国際的に評価される核医学教室であるようにと願っている。